

謎の鐘と竹田のキリシタン歴史

竹田市歴史文化館内の暗い部屋にあるガラスの箱に収められたサンチャゴ病院の鐘は、謎めいた雰囲気を出している。重さ 108 キロの鐘には、病院名と 1612 年という製造年が刻まれているが、それ以外のあまり目立たないサインが、この不思議な金属工芸品のストーリーを語っている。鐘の周囲に伸びる 2 本の明瞭な線は、鐘が 3 つの部分に分かれて鑄造されたことを示唆している。この方法は、日本で梵鐘を鑄造する際に伝統的に用いられてきた。

サンチャゴ病院は、16 世紀後半から 17 世紀初頭にかけてキリスト教が定着した長崎のキリスト教医療施設だった。記録によると、病院は 1612 年に増築されており、この鐘はこの機会に鑄造された可能性が高い。

しかし同じ頃、日本のキリスト教徒は政府から脅威とみなされるようになり、迫害が強まった。最も悪名高い事件のひとつは、1597 年に長崎で起こった 26 人のカトリック信者の磔刑である。弾圧政策が続く中、サンチャゴ病院は 1614 年に閉鎖を余儀なくされた。

サンチャゴ病院の鐘がどのようにして長崎から竹田まで運ばれたのかは不明だが、わかっているのは、町の上にある岡城に隠されていたということだ。病院が閉鎖される数十年前から、竹田は改宗した大名、ドン・パウロという洗礼名を得た志賀親次（1566-1660）の統治下でキリシタンの安住の地として知られるようになっていた。

志賀家が 1593 年に岡城を去らなければならなかった後、新たに岡城主となったのは中川家である。中川家は、当初はキリシタンに寛大な政策を続けたが、次第にキリシタンに対する取締りは厳しくなり、多くのキリシタンが苦難の道を歩んだ。

竹田にはキリシタンにまつわるたくさんの伝承が残る。武家屋敷通りの奥にたたずむ「キリシタン洞窟礼拝堂」もその一つで、岩壁に教会を思わせる洞窟が掘られ、キリスト教の礼拝堂ではないかと考えられてきた。

岡城は 1874 年、武家支配を終わらせ、日本の近代化のきっかけとなった明治維新の後に取り壊された。この時、サンチャゴの鐘は中川家の神社である中川神社に移された。そこで見つかり、現在は竹田市歴史文化館で展示されている。